



常識を疑うことの大切さ

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼しかし、ピロリ菌の存在と、それが胃潰瘍や十二指腸潰瘍の原因になるといふ発見が医学界に認められるまでには長い時間が必要でした。胃酸の過剰分泌やストレス、食生活などが胃潰瘍の原因であり、強力な胃酸のもとでは菌は存在しえないとするのが医学界の常識だったからです。マーシャル博士は最初の論文の掲載が拒否された時の手紙を大切に保存しているそうです。

博士は「科学の世界は民主主義ではない」と語っています。つまり、既成の常識を疑い、異端とされるような学説から科学の進歩は生まれるからです。既成の権威や多数意見によりかかるところからは進歩は生まれません。

▼マーシャル博士は科学の進歩にとっての仮

▼ノーベル賞受賞者として著名なバリー・マーシャル博士はピロリ菌がほとんどの胃潰瘍の原因であることを突き止めた学者の一人です。ピロリ菌の駆除により、胃潰瘍患者は激減し、日本においても関連した医療費が大幅に減りつつあります。胃潰瘍が胃がんの発症につながることから、胃がん患者の予防につながることも期待されています。

設の重要性も指摘しています。アインシュタインの相対性理論は長い間実証はされていませんでした。だからアインシュタインは相対性理論ではノーベル賞を受賞できませんでした。しかし、多くの後進がこの仮説に基づいて研究を続け、相対性理論が正しいことを実証したのです。その意味で優れた仮説の提示は科学の進歩にとって極めて重要なのです。

▼政治体制としての民主主義の優位性は、民主主義の抱える様々な欠点を考慮しても、認めなければなりません。あらゆる独裁は、ある時点においては効率的かつ合理的であったとしても、必ず腐敗と非合理の温床になるからです。しかし、だからといって民主主義の多数決原理をあらゆる分野にあてはめ

ようとする傾向は、科学のみならず様々な都合の原因になりかねません。その一つは世論の権威に寄りかかろうとする論調です。政治家が世論を無視することは許されません。しかし、世論はマスコミの論調に大きく影響されるものです。自らが創り出した世論をふりかざして結論に導くことは、ある意味では牽強附会のそしりを免れないでしょう。

▼いかなる場合にも、常識や権威を疑い、少数意見や異端の言説に耳を傾ける謙虚さが求められます。自らの知識や理解が本当に十分なものであるかどうか。権威や常識に寄りかかっているのは自分自身もしれない。時々立ち止まって、そうしたことを考察する勇氣が必要なのではないでしょうか。